



Sukimaki Newspaper PAROLE Vol.3 | January 23, 2023
<https://sukimaki.com>
@sukikara_makiko



SUKIMAKI
ANIMATION

パ ロ ル

vol.

3

無 料

次回展覧会

LUNATIC PLAN(e)T 原画展(仮)

2023年2月25日〔土〕- 27日〔月〕

3月4日〔土〕- 5日〔日〕

Open : 13:00-19:00

場所 : gallery So-Ra 大阪市東住吉区南田辺1丁目2-6

so-ra.stores.jp



アニメーション上映会 :

○14:00- ○18:00- : A プログラム 『深海の虹』『雪をみたヤマネ』

○16:00- : B プログラム 『やまなし』『カラスの涙』

上映時間 : 各プログラム 30 分

料金 : ¥1,000 (2 プログラム購入の方は ¥1,500)

* 原画展のみの入場は無料です。

予約メールアドレス : info@so-ra.me

各回定員 6 名 (ご予約優先となります)

SUKIMAKI ANIMATION

2007年に鋤柄真希子が立ち上げたアニメーション・スタジオ。2010年以降は松村康平と共に、マルチプレーン撮影台を使った短編アニメーション作品を制作している。

『LUNATIC PLAN(e)T』

制作日記 #03

「輪廻」

*LUNATIC PLAN(e)T

現在 SUKIMAKI ANIMATION で制作中の新作アニメーション。2022 年 7 月ついに脚本脱稿！

動物と植物が織りなす宇宙を舞台にした SF ファンタジー。



『LUNATIC PLAN(e)T』に2つの軸が見えてきた。ひとつは親から子へと繋ぐ種の連鎖。もうひとつは木になることで種を飛び越える命の連鎖。後者の連鎖は私が持つ輪廻のイメージに近い。輪廻という輪を連想するが、私が考える輪廻とは糸が絡み合い「ヨリ」を作ってるような形をしている。たくさん糸が宇宙誕生と共に生まれ、途切れることなく現在に繋る。しばらく後に「ヨリ」は解けて、他の新しい糸と再び「ヨリ」を作る。その糸とは宇宙に存在する原子のことで、たくさん糸が集まってできた「ヨリ」は宇宙を構成する有機物や無機物を指す。私とは偶然生じた糸の「ヨリ」のようなモノ。

人の細胞は3、4ヶ月で90%が入れ替わると言われている。新陳代謝の過程でかつて私だった細胞は老廃物として排出され、バラバラに分解されて別の何かへと姿を変えていく。それは空を飛ぶ鳥かもしれないし、路傍の石かもしれない。食事や呼吸によって新しく私に取り込まれた物質は、かつてあなたの一部だったものかもしれない。

1度私となった原子ひとつひとつに私の意思が宿っているのではと考えてしまう。死を迎えると私を構成していた物質の結合が解かれ肉体が崩壊するが、原子そのものは消えない。私は細分化され世界に溶け、かつて違う生を生きていたものたちと混ざり合い、新しいものへと姿を変えていく。これが私が想像する輪廻である。

『LUNATIC PLAN(e)T』で、動物たちは木になり森を作る。それは皆が生きていくための環境を作るためで、個々の動物が生き延びるためではない。生きもの全体をひとつの生命と捉え、その生命が生きていくための選択なのである。本来なら誕生と死を繰り返すことで起こる生命の混ざり合いが『LUNATIC PLAN(e)T』の世界では、動物が植物にメタモルフォーズすることで性急にその営みが描かれる。

散歩する無意識 —松村康平映画評—

『NOPE/ノープ』 (2022) Jordan Peel

ホラー映画の新しい地平

ジョーダン・ピール監督の長編3作目となる『NOPE/ノープ』は、過去2作同様ホラー映画にカテゴライズされている。(監督自身も「UFOをホラーで描きたかった」と発言している)しかしこれを真に受けて表層的なストーリーを掬い取るだけでは本作を味わい尽くすことは出来ないだろう。ピール作品はホラーという看板を掲げて描かれる本筋のプロットの裏側にじっとりと張り付いた影のようなもう一つ別のプロットが蠢いて併走しているように感じられる。(それを顕在化して描いたのが2作目『US/アス』における地上と対を成すクローンが収容された地下世界である)かつて黒沢清監督がホラー映画の顔をしながら仕掛けた極めてシネマコンシャスな実践を軽やかに刷新し、異なる入射角度でジャンル映画の可能性を拡張させることに成功している。

本作冒頭で明らかになる映画の礎を築いたE.マイブリッジの『動く馬』に乗っていた騎手は黒人だった、ところが騎手の名前は歴史から抜け落ちており、未だ正確な記録が分かっていないという史実。(主人公家族はこの騎手の末裔という設定)映画産業においても黒人が如何に不当に扱われてきたかを前口上として、社会問題を想起させる会話や舞台設定(BLM、アニマルウェルフェア、LGBTQ、監視社会など)

おしっこと青首大根

土から育った植物や虫が、枯れて死んで土へ返り、新しい命を育む。畑で起こる循環は私に幸福感を与えてくれる。私は野菜を食べることでその循環に混ざってもらっている。いつか糞尿を肥やしたいなと思っていたのだが、息子のおかげで願いが叶ってしまった。おしっこを終えて、近くの畝の青首大根を抜くと、立派な又根だった。どうやら土が固かったらしい。二年目はもう少し野菜作りが上手にできるかな。

畑を始めてもうすぐ一年が経つ。畑にいと季節の移り変わりをを感じる。春は行くたびに新しい草や虫が登場する。夏の植物は恐ろしいスピードで成長し、刈り取った草たちは溶けるように土へと返っていく。秋はそこかしこでたくさん幼虫が蠢いている。でもある日突然みんないなくなり、冬が来たことを教えてくれた。冬は時間が止まってしまったのかと思うぐらい変化が少ない。でも年明けに採ったほうれん草は驚くほど甘く、植物たちの内側は目に見えない形でどんどん変化しているのだなと思った。

畑を始めるまで、冬は枯れ草色のイメージだったけど、畑の中は小さな柔らかい草が地を這うようにびっしりと生えていて、緑の点描画みたい。大きく立ち上がると木枯らしにやられるからか、みんなできるだけ平べったく横に横に広がっている。高菜やほうれん草の間引き菜にはだいたい何かの草が絡まっていて、ちゃんと取るのが面倒くさくて一緒に食べてしまっている。マメ科の草は案外美味しい。そんな草たちに息子のおしっこがキラキラと降りそそいだ。私は「みんなとても嬉しそうだよ」と息子に返事をした。

2歳の息子はトイレトレーニング真っ最中。畑にトイレがないからオムツに替えて行こうよと言うと、「イヤ。お兄さんパンツがいい」とのこと。じゃあせめてトイレでおしっこしてから行こうよのお誘いも、「イヤ!」と突っぱねるのでそのまま畑へ。着くやいなや「おしっこ!」ほれみてみ!仕方がないので畑のすみっこで初めての立つション。不慣れ感満載の中、何とかきれいな放物線を描くことができて一安心。太陽の光でキラキラと輝くおしっこを見て、息子が「みんな喜んで?」と聞いてきたので、少しびっくりしました。

